

斧琴菊

泉鏡花作

その一

―― 飛でもないこと、盲人が池へ落ちた。――  
いや、落したもおなじなんです、氣の毒な事を  
した――

池といつても、築山の松を模様にして、月影に澄  
まして居るのではない。谿川の急流を水門から取入  
れ、せき落す、館内を繞る水源で、舟も浮べられる。  
深くはないが、廣く水を湛へ、中の島の巖の根は、  
風騒ぎ雨打てば波立つばかり。水の行方は、ざざと  
咽び、さら／＼と靡き、とん／＼と舞ひ、鼓にも三  
味線の絲にも乗つて、客間、浴室を、隨處お好みの  
調べで流れる。

池を抱いた伊豆修善寺温泉の大旅館、菖薫樓の帳

場が、もう戸を閉さうとした、霜月のはじめ、午前二時に近い。――詰合つた番頭、接待がかり、男衆の、自宅から通ふのはそれ／＼歸り、部屋へひくものは引いて、泊り番の孝吉といふ三番番頭どころが、さて、寝ようと――大玄關正面は、しめると障子が連つた、が横手に渡り廊下の、長く橋がかりに續いた向は、其の池の水がこゝで瀬になつて、湯殿の方へ瀧を掛け、浴客の眺めに供へて、雨戸はたてないのであるから、板戸を入れるそれを、ばた／＼と閉めかけて、孝吉が心着いた。

「あ、さうだ。お北さん。」

「あい。」

もう寢支度の、襟つき縞物の萎えた袷に、腰紐ばかりで、この四五人づゝ一組、一方の女中がしらの中年増が、寢部屋から内のもの専用の湯へ行く處を、大火鉢のわきで呼びかけられた。

「霧の三番へ療治に行つてる永庵

だが

ね、まだ下りて來ないやうだがね。」

「さうですね。え、まだ歸りませんわ。」  
火鉢に軽く中腰で、表障子の中硝子から式臺下を覗いた、目は迅い。出入りの面々の脱勝手の極つて居る處に、古足駄が一足あり。ずらりと並べたスリツパの、かゝる霜夜の千鳥に對して、蠣殻の如く、たゞきの隅に、爪革ぐるみ、ごつんとして居る。

「成程ね、いつが日にも、かたんごとん、按摩の高足駄は古風過ぎると思つたが、かういふ時は、講談本の探偵小説ぢやあないけれど、實地驗證が速でいゝ。」

と欠びまじりに、ははは、と笑つて、灰の中に揉み消した半分の卷蓆に火をつけながら、

「一寸行つて見て来ておくれよ、お北さん。」

「なぜさ。」

「何故ぢやあないやね。揉ませながら、うと／＼寐るといふのが、元龜、天正頃から、道中のお客のお定り見たやうだけれど、揉む方が居睡りでもして居ちや困る。」

「あの、慌てものの、性急やが、居睡りなんかす

るもんですかよ。」

「だがね、慌てものの性急だつて、居睡りをしないとは限らないよ。」

とお北を見て薄笑ひして、

「見て来ておくれ、何しろ遅すぎる　　ど

うせ、ついでぢやあないか。」

「ついでにしては、方角が違ひますわ。それだし、ちつと遠方ですのね。」

「だつて、霧は眞北だよ、此の内では。お北さん、お前さんの劍先ぢやあないか。何も、まはり合せさ、今夜は其の星に當つたんだ。」

「つまらない身の上ね、糠星とやらだわ。」

と上草履で廊下へ出たが、据附の椅子に手拭を預け、廂下りに瀬の上の、まばらな柿の梢を透く、山

間の空を覗いて、

「あしたは霜が下りさうよ、寒いお星様が光つてる。」

と腰紐を絞つた胴ぶるひを一つしながら、吹込んだ落葉をさら／＼と棲さき摺れに、反橋づくりを、流を横ぎつて、向う廊下へ渡ると、榎の大木が陰を

浴びせて、角の電燈も薄暗い。其の奥の巖窟の、もう落したあとの湯の雫が、ぱちゃん、と流よりも高く響く。

「夜が更けると、女中たちには、これから眞直に、錦葉に因んだ綾織ケ池といふ其の大池から、霧の三階へ攀ぢ上げる。――木曾の棧橋。――一本橋。――水門から巖組へ吹きぬけの細い橋廊下が約束の難所になつて居る。」

途中、客間がぼつ／＼と三つばかり、中に谿川ごのみの流が、こゝばかり音もなく静に通つて、向うが内證の住居ゆゑ、奉公人の廊下の振舞が直ぐに主人むきの耳へ入つて、はしたないと叱言の種だから、特に取澄ますのが例なので、恚ういふ折は、そつと歩行くだけ悪く陰氣で。さういへば、奥山から奉公に出て来た湯番の、愛想ぶりに仕掛けて置く、棧俵ほどの小さな水車の、見人があると張合らしく、くるり／＼廻るのが、人影のない時は、動くのも無駄らしく、働くのもチエツ馬鹿々々しいと、嘲けるが如く片づけて居るのさへ、猿が齒を剥いた形である。

「いやだ。」内證の雨戸は、ひつたりと閉つて居るが、一方の客間の襖を漏れて、次の間へ映る灯の影の障子の小間の一隅も、古行燈に見えて、うそ寂しい。

「おゝ、氣味が悪い。」

お北は兩袖をすばめて通つた。

一目、渺として、なほ大い。

池の風の冷たさ。

恰も宵に一時雨した雨上りの水の濁つたのに、中島の燈籠も消えて、星の影も見えず、淀んで暗い。

雨にも風にも驚かぬ、かはりには、陰に籠つた、屋根の鐵燈籠が水の上の細廊下に只た一つ。大きな鯉が麩を呑んだやうにぼんやりと點いて居る。

取着的の戸口を、お北が縮まつて抜けて、其の橋へ渡りかゝると、

「願ひます。」

薄ぼけた、かすれ聲。

「檜皮葺の屋根の上か、橋の下か、背後の巖組は、ものは言ふまい

怯え立ちにすくんだ、お北の耳へ　――

「願ひます、お北さん。」

「イ、イ、イ。」

引きいきになつて、よろけさまに柱に凭れかゝると、池の中で、

「願ひます、お北さん。お光さん

お浦さんでございますか。」

傍輩の名が様づけに恚う並ぶと、對手が魔ものでも、化ものでも、満更他人ではなささうで、一息

氣の静まつたお北が、目で泳ぐやうに池を透すと、

橋際三四尺の水の中に、朦朧とした坊さまが、琵琶

箱を背負はないばかり、半分沈められた人柱に似て、

身體はあきらめたが、無念さうな顔をして、つくね

んと濡れて立つて、

「誰方様なりとも　へい、願ひます。へ

いと寂しい聲とともに、

ばしや／＼と水を匆ねた。

「何だ、池へー」  
岩破といふ勢で、孝吉が障子と板戸を一掴みに引  
開けると、忽ち半身を敷居へ踏出し、「按摩が落  
ちた。」

「一寸、一寸。」

お北が息せいて、引張るやうに両手を振つて、

「一寸大變よ。」

「やつたか、うむ。もう土左衛門か

い。」

と飛出した氣組に似ず、間の抜けた聲を出す。

「土左衛門だか、何だか知らないけれど、池の中  
にぼかんと立つてる。」

「串戯ぢやない。ぼかんと立つてる土左衛門があ  
るものか。引張り上げてやりや可いぢやあないか。」

「だつて、氣味が悪いの驚いたの何のツて

あの暗やみの池の中から、薄ぼやけた聲で呼ば  
れた時は、よく目をまはさなかつたと思ふんですよ。

「ー お、お北さんー」

「變な聲だ。お、お北さん

か。」



と廊下を飛びかげんに、しかし二人とも、客座敷をかねた、ひそ／＼聲。

「劍尖だね。よく盲人に、お北さんとわかつた

ね。」

「ですからさ、私も聞いたの。よくわかつたわねッて。さうすると、永庵さんたら、誰だかわかりはしないけれど、めかいは見えず、途方にくれた處だから、何でも方角のついでる名の婦を初端に呼んだんだつてさ、いやだわねえ、私。」

「何だ、そんな問答をして居る間があつたのかい。

「――永庵も永庵だ、さうと知つたらかじりついで上りやいゝのに。」

「あら堪らない。」

と身震ひして、

「かじりつかれた日にや、とも倒れだわ。」

「體のいゝ心中だね。夜が白むと、ほら、此の水

車に引かゝつて――按摩の首と、女の首

「

「あれえ。」

石の上の水車が  
歯を軋ませ、八角な面で、キシリと笑った。

「何うしたんです。何うしました、永庵さん。」

「へい、願ひます、へい おゝ、これは

何うも、孝吉さんでございませうか。何がさて、どうもはや、たゞ此の體でございましてな、願ひます。」

「あれ、中島の方を向いて拜んで居なさる、さつきは、ちゃんと此方むきで立つて居たのにさ。」

水車の生首に怯やかされて、あとの反橋へ遁戻つたお北が、わるく拔足で戸口へ出た。

「へい、いえ、はつと落ちましたが最後、お内の手前、お就寝中のお客へ對し、お助けを願はうにも、大きな聲は出せませず、いや何うも、座頭が川を渡るといふは、昔話にも聞きました、盲目が池へ落ちましたぐらゐ、始末の悪いものはございませぬ、手前生れてからはじめてで。」

「度々あつて堪るものかね、串戯ぢやあない、永庵さん——此方々々。さあ、此の手につかまつて、いや、どっこいしょ。」  
「じゃぶ／＼と水の音。永庵の腰から下は、蓑のちぎれた雫である。」

「あゝ、助りました、へい、はい。」  
手探りながら、念のため檜皮葺を支へた、細柱にひとと絶ると、鐵燈籠の薄あかりに、引きゆがめた、大きな口の、青い顔で、

「なまじ、あがきましては、躓いたり、轉びましたり、これが、氷中の事とて、溺るゝの基と、あきらめて、とぼんと立つて居りましたがな。唯今お北さんがお見えになりましたは、へい、急に里心がつきまして、寒さは寒し、一刻も早く陸へ、へゝ、えゝ上りたさに、踵で確と水底をふまへて置いて、身體をぐるりと、その、水車のやうに廻りながら、お待ち申して。」

お北が變な顔をして背後を見た。

「へ、へ、へ、却つて外方を向いたらしうございますな。」

「だから、その時すぐに、手をひいて上げりやいのに、といつてるんですよ、  
お北さん

に。」

「だつたつて 口を利かうと思つても、

聲も何も出やしない。可怖くつて、私。

でもよかつたね。正のものの永庵さんで。今度来る時は消えて居やしないかと、おつかな吃驚で、密と覗いたほどなんですもの。」

「ご尤で まつたく半分消えましたでこ

ざいます。」

と氣が落ちついたか、柱の根へ、ぐしやりとなつて、ぐわち／＼と震へ出した。

「消えるより、氷つて了ふ。かうぐしよ濡れぢや

あ。さあ何うすると 差當り。」

「お番頭、電話を何うぞお掛けのほどを願ひた

う。」

「お醫師、あゝ、然うね。」

「あゝ、お北さん、水は一滴も飲んで居りません。  
あぶ／＼の憂は、い、い、聊も。」

あゝ寒い、いさゝかもございませませんが、ずぶ濡れでございしますので。」

「引端折つて居なさりやよかつたんだなあ、いや、それだと、なほ寒いか。」

「寒いにも、冷いにも、どの道水中でございませぬ。其の儀に一向さし引はございませぬが、まくり上げて立つて居てごらうじまし、御通行の方に對し、別して御婦人でもございませすと、尾籠千萬へ、へ、へ、へ。」

「尤だがね、は、は、笑事ぢやない。」

永庵さん、確りなさいよ、此の際、御通行でもなからうぢやないか。」

「えゝ、何、それもございませぬが、第一、山姫様——その、龍神様でございませぬか、其のお姿が見えますやうで、まくりませぬなどは、お前様。」

と半ばきよとんととしていつた時は、ぐたりとなつて、橋廊下へ手を支いた。

「確りおし、永庵さん、電話の事だよ。まさか、  
どうしたんだか知らないけれど、龍神様へ。」  
「勿體もない、お電話は、私どもの寄合所へ。」  
「―― 家内をお呼びを願ひます。」

「あゝ、着ものだね。や、肝心な事を、さうだ、  
さうだ、紺屋の白袴だったよ。永庵さん、家から取  
寄せるたつて、其の間、其のぐしよ濡れぢやあ  
湯へ飛込みなさい。お客様の湯は抜いてある、  
私どもお北さんたちの入る内の湯だ。南の端の地下  
室さ。些の間はあるから、飛込むぢやない、驅込む  
んだね。」

「と、も、願つて、とも存じますが、驅けられま  
せんで、へい。」  
「成程、なぞと、これは落着いて居る處ぢやなか  
つたつけ。」  
「と其癖、落着いた風で居たつけが。」

「さあ、おいでなさい。驅出さう。」  
「お北の、あとへ退つたのを見て」

「逆縁ながらと、ぼくが手びきか。」

「へい、へい。」

「永庵さん、お北さんぢやあ不可いや。こんな時

は、お里> ー ー お里 ー ー と呼ぶんだ

ね。」

「何にいたせ、御利益を頂きます、おありがたい  
事で、へい。」

「あら、永庵さん

歩行くあとは川のや

うよ。」

と白袋を庇つて爪立ちながら、床を拾つて、小  
襦を高く取ると、客商賣、友染の媚かしいのが、あ  
の水車に巻かれるばかり、板に、びしゃ／＼と水が  
流れる。

「こりや不可い、綿入だから、ブツしり吸つてる  
んだ。」

「重うございますな。」

「さうだらう、思切つて裸になるんだ、やけに素  
裸さ。お脱ぎなさい。さあ脱げ、やい、脱がねえ

か。」

と笑ひながら、精をつける。

「尤も脱ぎます、お安いごようです。」  
「追剥に向つて、お安いごようもないもんだが。」

「永庵さん、財布、褌口は。」  
とお北が横から心着ける。

「へい、それは、不斷、腹巻に心得て居りますので。」

と突立つ威勢はないのだから、首を縮めた泥龜が伸び上つたやうに踞む。

「や、永庵さん、越中だね。いや、こ

れで、うまれば御當地と来ると、まるで話だ。」

「串戯ぢやあないよ、孝さん、お氣の毒だわ、寒いわね。早く連れてつてお上げなさい、衣ものは一絞り絞つてから運びますから。」

と褌を、もう一息、白脛へぐいと端折る。

「谿川へ、紅い袴が、洗濯に出ちやあ、丹波の國



の山奥やまおくだね、永庵えいあんさん、これから藤蔓ふぢづるの渡わたした、よ。」

「さうなりや盲目めくらは這はひます。四よつつに這はへば、危あぶ氣なげはなし、それに身内みうちが暖あたたまつて」

「飛とんでもない、夜半よなかに此この廊下らうかを裸はだかの坊ぼうさんに這ははれちや、菖薫樓しやうくわんろうは化ばけもの屋敷やしきだ。足あしを空そらでも、それ急いそいで。」

その二

「それがな、孝吉の手曳で、眞南の、右の内湯へ急行でさ、貴客。彼處を一階下りて、二つ目の石段へ窺きかゝると、わあ、と怯えて永庵和尚、再び孝吉の頸筋へ嚙りついた。――龍神様のお姿が見えるやうだ、底の湯殿に。むつと暖になりさうな此の石窟が悚然と冷い。風呂でなく、また池へ落込む氣がするツて、震へたさうで。妙にまた、七人と八人と、混合つて、一日一夜の疲れやすめに、あなたの前でございませけれども、安ものの油繪のやうに、肱を髪に突かつて仰向いたり、のめつたり、で、好勝手な事をしやべつて居た、湯の中の女中どもが、きやあも、すうもありませんや。變に魔が魅したやうに、ひつそり息を詰めたさうでございましてね。何ね、こりや其の、恚う申しちや如何だけれど、客馴れて居りますから、不意に男が入つたつて驚くんぢやありませんが、黄褐色の素裸の、ゆるんだ入道が、天井からぶら下らうとは思ひませんや。こゝぢや孝吉も、怪訝な氣がいたしたさうで。か

うなると怪談じみですが、何か、其の永庵が、池へ  
落ちた原因は、と申すと、あなたが昨晚、お療治を  
なさりながら、あの和尚にお話しをなさいました。

――天城山、明琳の瀧でお逢ひなすつたといふ、  
きれいな婦人といふのが――此のお座敷を出て、  
二つめの梯子段へかゝります時から、見えない目にも、  
くつきりと映つて、ちら／＼する。

しかもそれが、後姿で、頸脚のうつくしさ白さとい  
ふものは――十七の時から、可哀相に、俄盲  
目、尤もはじまりは片目だけ幽に見えました。――  
その十七の時から以來、ゆうべぐらゐ、目の前  
に白いうつくしいといふものを、夢にも見た事はな  
い、と言ひます。

處で、和尚はまるで目の見えなくなりません前に、  
一生の思出でございませう。伊勢路から京大阪かけ  
て、ずつと順拜、見物に参つた事がありましたな。

尤も親兄に連れられてでございしますが、其のせつ、  
見るもの、聞くもの、といふうちにも、見るもの、  
見るもの、と餘りにも眼に念力を籠めましたせゐるか。

――中でも岩國の錦帯橋で、夕虹を凝視めた

時からだと申しますが、僅に見える方の、一ツの目に、紅絹か、緋縮緬かと思ふ、ひら／＼と眞赤なものがちらつきはじめて、何としても消えませんが、酸漿ほどの血の涙とは、むかしの本で見ましたが、まったく血の涙でございませう。出来ぬなから療治をして、その酸漿ほどののが、脈一條ばかり残つて、盲目になりました。其があなた、昨夜半の幻の婦人の白妙とも何とも言へない頸脚へ、織い紅絲ほどにかゝるのが、ちやうど紅羽二重の肌襦袢の透くやうに映つて、こればかりは、その女體が、神よりは人間の女の柔な肌らしい。

あゝ杖を持たいでよかつた。杖があつたら、怪我のつもりで、些とでも、あの頸へ觸つたら、其の杖は、忽ち黄金の山葵、七寶の椎茸にも成つて、舐ると、甘露の不老不死の味がしよう。持たないでよかつた。杖があつたら我慢はなるまい、と衝動といひますかな、その堪へられるのが僥倖だと思ふうちに、堪へられなくなりましたさうで、つい持たない杖の僥倖を忘れて、永庵が、指の尖を、うか／＼と婦人の頸へ近づけたと思ふと、ばちゃん

は、は、目の紅いのが、池の緋鯉と同居したさうでございませう。

よくそのくらゐで助かりました。悪く杖でなど中らうものなら、いきなり池の眞中へ、宙を投出されたらう、と舌を震つたさうで。――和尚が湯から上つて、歸りがけに、孝吉が、お銚子の残を、寢酒に樂みます。それを一杯、がぶがぶと相伴しながら、とりとめも、前後も分らない事をな、昨晚の處では。

處で、其の婦人と申すのが、夢でも現でもなく、當人の幻でもない。あなたのお話の中から、出ましたものださうで。」

――と云ふ。これは莒薰樓の主人である。

とすると、

（――飛でもないこと、盲人が池へ落ちた、いや、落したもおなじなんです。氣の毒な事をしました。――）

のは、この霧の三番に、主人と、今さしむかつた、

逗留中の客である。

客は、橘川守一といつて、一寸舌たらずの鷗のやうな名だから、自から巫雀園と稱ふる狂言作者で、芝居好の主人とは永年の懇意である。

時節がらなり、身上なり、温泉に保養といふ身分ではあるまいが、大方宿料が割引だらう。ゆつたりと構へて、同伴が二人ある。一人は細君で、一人は細君の姪で、一旦嫁いだ出戻りだが、矢張り新造だ。

細君は、晩飯が済むと、不精ものの亭主を寢床へ押つくねて置いて、新造づねに、手すきの女中を二人誘つて、谿河向うの小屋へ、田舎まはりの映畫だか、芝居だかを觀に出掛けた。

湯上りの晩酌に、安くていゝから、ぐら／＼と煮えて、昆布の躍る、湯豆腐で、酒のきゝめは夥しい。とろ／＼ものになつて、我が宿ならば然うはゆくまい。河蟬の巢のやうな、羽根蒲團に包まつて、枕に近い谿河を本調子に聞く處へ。――

「これは御主人。」

「いや、其のまゝ。」

と茶微塵の羽織の襟を軽く扱きながら入つて来て、ちよつきり結びの胸の紐を、懐中の方へ引いて、長火鉢のわきへ。

「さて御退屈

と申すうちにも、兩三日

伺ひません。何にいたせ、山家はな、内外とも、凡

そ事ありといふと、其の都度梶原様お入りい――

と來ます。従つて庄屋狩出しとなりますので、石

持こそ着けません、着つけ萬端、雑と此の體、ど

の道、立者の承りません役所で、そりやそりやと、

町中、村内、驅廻りの忙しさ。來がけに帳場で――

御兩名、大部屋の腰元をつれて、お出掛けの處を

御意を得ました。が、相手欲やでおいでなさる、

はゝゝ、お世辭にも、其のお言葉について一寸お邪

魔を。えゝ、布團、何、煙草盆。然やう

な事で、女子供を使ひますのは庄屋の役得、ボン、

と一つ。」

腕を開いて、手を敲きさうにして、笑つて留めて、

「やりさへすれば、此の舞臺ぶたい」だけは用が  
辨じます、勝手は知つたり、お構ひなく。  
但しお茶を一つ、これは御内室お加減の所を頂き  
ませう。」

其處で、永庵が池へ落ちた　――　昨夜の話が出  
たのであつた。



### その三

「御主人。」

所が、私が永庵に話した、

其のうつくしい婦人といふのは、自分で見たのでは  
ありません。明琳の瀧、谷底の掛茶屋  
と  
いつても、床板の合せ目へ、眞青に澄んだ水  
――  
春闌な頃だと、堤の敷莫蔭の合せ目へ、緋水瓜  
や董が顔を出さうといった工合に、藍、緑の、巖や、  
石や。――その水の上に、竹の欄干をのせて居  
る、小屋といふより、あれは木の葉で屋根を葺いた  
筏だと思へばいゝのです、志した、もみぢには未だ  
早かつたのですが、幽邃とも、静寂とも。  
しかし、あの瀧は凄いほど浮世離れのした景色で  
す。尤も御存じではありませんせうが。」

「土地で居て、わづか三里ばかりと云ひますのに  
―― 慾張つて家業にあせる、と思召しもお恥し  
いが、そればかりではありません。庄屋がまけに取  
紛れて、ついまだ、行つた事がないのでございます。

うはさのみで 實は、またあの瀧が、それ  
ほどの名所で居て、山奥から村里へ聞こえましたの

は、此の七八年

十年とはたちますまいな

ほんの近頃ちかごろの事ことでございますから、名所記めいしよきにも、  
其處そこはな、時代じだいはあやふやにして、中古ちうこ、千仞せんじんの谷たに  
に生茂おひしげる樹きの梢こすゑの岨道そばみちを通とほる樵夫きしりが、柴しばにさした斧をの  
を落おとして、樹きの根ね、巖角いはかどに絶すがつて探さがしに入はひると、そ  
れまでは誰だれも知らなかつた、其その明琳めいりんの瀧たきが、晝尚ひるな  
ほ暗くらい山蔭やまかげに、さながら純白じゆんぱくな練絹ねりぎぬに、月光げつくわうの映えいず  
るが如ごとくにかゝつて

「其その通とほりです。」  
と橋川きつかはが言ことばを挟はさむ。

「はゝあ、御一見ごいつけんの上うへのお言葉ことば。土地とちとしてもあ  
りがたい。處ところで、其その瀧たきの裾すそを、すつと、其そのまゝ、  
琅らうかん、翡翠色ひすゑいろの織臺おりだいに取とつて、あでやかなる貴婦人きふじん  
が、高機たかばたを、黄金きんの梭をさで織おつて居ゐらるる。――鳴なる  
は瀧たきの水みづ、と來くると、そこらの勸進帳くわんじんちようの惡口わるぐちが言いひ  
たくなりませす、憎にくまれ庄屋しやうや、えゝ、よくない癖くせでな。  
それはさておき。――瀧たきを其そのまゝの織絲おりいとは、彌やよ

生半ばの斷崖の山櫻ほのかなのが、谷の翠の氣をこめて、薄紫に染まりつゝ、貴女の手にて、纏れず、亂れず、樵夫の斧が鵝の片翼のやうに機の下に落ちて居た。――その時から世に知られはじめた、天城の深秘境なり。雑と此の趣だと存じます

本來は、樵夫が瀧壺へ入つて、白衣、紅袴の姿が水の底に居らるゝのでなくつては、と思ひますが、近頃、發電所に水源を分捕られて、瀧も、細り、淵も、淺いやうでは、水底の御殿は嘘らしいと云ふ利口から、樵夫が見た時、貴女はもう巖角に現じて居らるゝ。縁起も深味がなくなつたなぞ、と手前などこそ、耳學問の生兵法で、利口振つた心得方を内々して居たのでございますが。

――お話だけで、永庵が池へ落ちるとなりますと、これはよく伺つた上で、自分どもも淺墓さを思知らなければなりません。

と番茶の碗を、玉露を含むが如くにして、口をつぼめて眞顔でいふ。居直つた横顔に襖の陰が落着い

た。

「御主人、何ですか、かうなると、永庵に話をしたのが、おとなげないやうですが、ご存じでせう。按摩さん話ずきで、そのかみがた見物が得意です。それに發句

「え、／＼、大分鼻高ものでな。」

「だもんですから、山の景色の出たついでに。」

「― 處で、私だつて現在見たのではないのです。」

勿論、折角ですが、琴を弾くお姫様、機を織る貴

婦人は、都ぢかは知らず、凡そ深山幽谷の、池だの、

瀧には、殆どつきものといつてもいゝので、

あなたの方で（發電所）が出ましたから遠

慮なく言ひますが、まったく明琳の瀧の（專賣）

とは行きません。

お話の由來記は、繪端書と一所に、瀧茶屋から買って来て持つて居ますが、これに對しては御同感で、瀧の音から、琴の聲や桜の音を聞かうとは、てんで思つても見なかつたんです。しかし妙なことを聞い

たんですよ。

私ばかりぢやありません。」

「御内室。」

「いや、あれと姪とは、この斷崖の下が、瀧、といふのを、山道から、あの眞暗な谷を覗いたばかりで辟易です。休茶屋が、下り口にあつて休みました。これは下りなくつて可うございましたよ。危い巖岨や、絶崖路へ掛けては、若い女なんぞ、私より健でせうが、霜が降つても、蛇が可恐い。――巖角へつかまつたり、樹の枝へ縋つたり、危かしく踏んで行く爪先を掠つて、草から草へぬら／＼と赤いのが這つて出ます。赤棟蛇の小蛇だと思つたら、蝶二ださうで、のつけからもう水氣滴るばかり、樹の下したの道は水を踏んで落ちるやうだつたんですから。

――一所に瀧へ下りたのは、周さん  
館くわんに抱かへの自動車じどうしゃの運轉手うんでんしゆである。

「さ、彼にも様子やうすを聞いて見ようと思ひましたが、午後から箱根越はこねこえ、乙女峠をとめたうげといふお好みのおとをし  
ましてな。」

「それから、お帳場の四郎さん。」

「伊豆仁田の産　　四郎とは臆面もなく名づ  
けましたな。はゝは、しかし、山入りには究竟な  
ともで。此の方も、人穴ではありませんが、驛へ御  
案内の出番で、今日はまだ逢ひません。其處で

—

「いや、然うお意氣組みなすつちやあお話がしに  
くい。何しろお平に。」

處で、私どもより前に、學生が一人、制服ではな  
かつたんですが、容子で知れます。美術學校らしい  
のが腰を掛けて居ましてね。寂しさうに。

食べかけの捻ぢ麵麩の大きなのを袋ぐるみ衣兜へ  
突込んで。此方が、例の木瓜、董の覗か

うといふ毛氈へ陣取つた時でした。　　をばさ  
んありがたうございました。さやうなら、と丁寧に、  
また妙に可懐しさうに。　　然うですな、五十  
ぐらゐ、染がすりの筒袖の上被を着て、前垂掛のも  
の柔かさうな、瀧茶屋の其のをばさんに、帽を取つ  
て、竹の杖をつきながら、青苔の生えた、切たての  
崖を攀ぢて歸つて行きます。顔色が太く悪い。

下田か、修善寺か、どつちへ行くのだらう、病氣  
でもありやしないかと、四郎さんも、私も、かた  
みがりとかいふ奴でね。思はず、茶を  
持つて来た、をばさんに聞いたんです。いゝえ、あ  
なた 病氣ではおあんなさらないが、變な  
事があつたのでござりましてね。――誰か、誰  
か来てくれ。――今しがた、此處からでは、ま  
るで、大木の枝の中からのやうに聞こえるのでござ  
りましてね。――頼むよ、誰か。――おや、  
をかしい、と聞きますうちに、――助けてくれ  
で――ござりませう。

年寄の癖に、かう申してはいかゞでござりますけ  
れど、家業にして居りますれば、この嶮峻な坂でも、  
其處は、あなた、少し曲りくねつた巖の梯子段のや  
うに、始終上りおりして居りますから、雑作はござ  
りません。足な草履で、すた／＼上つて、見ます  
とね、あの、學生さんが。――どうなさいまし  
た。――をばさん。をばさん。どうなさいまし  
たよ、まあ。頼む助けてくれでござりましてね。お  
踏へなさつた大巖の下が、がつくり窪んで、樹の根

と石をなへませにつりさがるやうな處がござりませう。あの突尖に、山櫻の樹が目の下に激しい流の上へ横すぢかひに一株ござりますね、それへ、横倒しになつて、幹をば抱いて、枝に縋つて、あをくなつておいでなさる、落ちる、落ちる、をばさん。――それから、よつと手を取つて、坂へ立たせてお上げ申して、まあ、下のお休み場所まで。やつと足腰のふるへが留まつたと、其のまんま、此の手につかまつたなり、こゝへ連れられておいでなさいましたのでござりますが、何でござりますか。――さあ、藍でもなし、紫でなし、納戸、空色のやうな、すんなりした肩さきが、學生さんの、目の下、二間の處に、枝葉の暗い中に、ほんのり、見えて、きれいなと誰にでも思はれますでござりませぬ、それで、上品な御婦人の姿が、ふつと浮いて、すつと一所に、瀧道へおりるのでござりますさうで。――その時、をばさんが言つたんですが。――

「はう。」  
と、主人が、苘の煙を、頬をくぼめて吸消した。

「まつたく後姿ださうです。――その頸脚の白



さ、うつくしさといふのが、何ともいへません。」

「え、お聞き申すまでもありません。――

事件でございますな。すなはち永庵の。」

あ、それだ。や、あの梯子段の下口に、其の白

い、きめこまかな。」

振向く次の室の六疊に、電燈が点いてない。

「閉つて居るのに、障子の外の下口が、巖穴のやうに暗く窪んで見えますよ。成程、この三階から、下の橋廊下へ眞夜中にかゝつては、お話

を伺つたあとぢやあ、てまへなども、踏みはづして落ちさうです。」

「變ですよ。私も、筏茶屋といひませうか。其處に居た時より、永庵に饒舌つた昨夜より、唯今の方が、身に沁みます。」

夜霧を晒して刷いたやうに、裏窓の障子が颯と際立つて、下の流の音が冴える。敷放した絹夜具は、月夜のやうな空色に、みだれ咲の山菊と、色を染め

分けた蔦である。

「その學生が、うつとりと見惚れながら下りて来る、目が茫となつて、山ひだから霧を捲いたと思ふと、其の姿が消えるのと一所に、がくりと踏外した。丁ど、その壊込みの斷崖の處で、何だかもう、眞直ぐには下りられないから、背後向きになつて足探りに巖角を踏んだんださうですが、手で掴んで居た上の樹の根が朽ちて居て抜けたので、身體が宙へ浮く處を、辛と、其の山櫻に抱ついたはいゝが、遙か目の下の、谿河の上へ乗出して居るんでせう。助けを呼ばずには居られなかつた、といふんですな。をばさんが、自分などは、まだお拝み申した事はないけれど、それこそ機をお織り遊ばすといふ、此の明琳の瀧の女神様でござりませう。――こゝら、二軒、三軒の山家、村里の人たちの偶にお姿を見上げたもの話では、紅の袴も、羽衣もめしてはおいで遊ばさぬ。霞の櫻、月の柳、おみ帯だつて、露の秋草、模様も縞も人間とかはりのない、つい通りのめしものぢやと申しますから、お前様の目に映つたのは、深山の桔梗、龍膽の色でござりませう。

屹とお前様をお迎へ遊ばしたのに違ひござりませぬ。  
瀧の傍へ行つてごらうじまし、と申したれば、學生  
さんが、あの淵で、鳶の葉一枚の影を見ても、落ち  
て死にさうだ、とおつしやつて、お茶よりか清水の  
水を一息にのんで、熟と俯向いて居なさつた處へ

――

私たちが、がさ／＼と落葉を分けておりた始末。

ビールを一つ。」

「え、申しつけませう。」

「いや、御主人　――　其の筏茶屋の時ですよ。

周さんにも、何、ビールなら一杯ぐらゐ  
と思ふ、周さんの影が、今其處に居たと思ふのが見  
えないのです。」

「一寸　お手軽な神がくし、周三は、仕

出しの役でございますな。」

主人は笑ひながら、眞顔で云つた。

「尤も、瀧茶屋のをばさんの話のうち

に、つい手近な戸棚から、ビールを取寄せて居ましたのですが、―― おや、居ない、と思ふ周さんが、その時、此方へ。―― 剣ヶ峯、槍ヶ嶽の尖端ともいひさうで、雲のかはりに、むら／＼と水がまいて、蒼空に浮いた形の、大巖小巖の間を縫つて、瀧壺の方から、何うでせう、その手に、嬰兒の頭ほどあります、大きな掬飯の、海苔で包んだ黒いのを

「

「行暮れて怪い一軒家に宿を借ると、古圍爐裡の破鍋で、人間の首と間違ふ奴でございますわ。」

「些と遠路を、急な思立ちで、辨當の折が間に合はない。  
當館を二時頃出ましたが、運轉

手は、まだ晝飯前

「

「臺所の飯炊の爺いが一握りにした、名ぶつ。大きな掌でございましてな、俗に二合半づかみ、といつて、一すくひに米を一合あまり。」

「そいつを食ひかきながら、周さん、巖飛びに引

返して来て　ー　極りが悪くなつたですよ

女神様の話を聞いて、めんと瀧に向つて、かぶりついて居ましたのが、何ですか、彼處から莞爾して見ていらつしやりさうで　ー　と言ふのです。

只、高調子でもなく、尋常な、こちらの、をばさんの話聲が、ものの十四五間、影も幻もないが、嵐氣が深いので、づつと遠く見える、瀧の落口まで聞こえたと見えるんですね。

また不思議に音がしません。

普通、そのくらゐ見事な瀧で、あれだけの距離だと、音の嵐が、耳近な話聲さへ吹取りますのに、唯寂然として、白衣が翠の巖窟に靡くやうに眺められますばかり。瀧壺を溢れて、一谷に包まれた、大きな淵も、溶かした藍が靜に漾ふやうなんです。

そんな筈は、斷然ありません。ありませんが、瀧の音が騒がしく聞こえなかつたのは、水口を巖で劃つた瀧の落口の處に、手足を突張つた、眞黒な人間

の胴中どうなかくらゐ、大きな兜蟲かぶとむしが腹はらを翻ひるがへしたのか、蝶あもりが反返そりかへつたのかと思ふ朽木くちきが一株ひとかぶ、落込おちこんで居ゐたんです。――

その朽木くちきの折をれで、響ひびきを遮さへぎつたのだと思おもはれます。

――周さんしゅうさん、お前まへが落おつこちて土左衛門どざゑもんになつたのかと思おもつた、格構かつかうがよく似にて居ゐる、と四郎さんしじろうさんがからかふのでした。洋服やうふくの腕うでを又またツと突出つきたした形かたちが、成程なるほど、よく似にて居ゐる。いまの學生がくせいさんも、

もし落おちなされば、あの體ていでござりましたよ、お危あぶない事ことで。しかし、をばさん、こゝから見

ると、勿體もつたいないが、お宮深みやぶかくか、奥おくの院いんの、白しろい美うつくしい姿すがたを見るやうなのが、あの朽木くちきで餘程よほど損そんじる。

村むらの衆中しゅうちゅうで片附かたづけたらよささうだが。な

か／＼、あなた、危あぶなくつて傍そばへ寄よつて手てはつけられませぬ。でござりますが、大事だいじござりませぬ。日ひのたちますうちには、あの瀧たきに打うたれますと、どんなものでも、皆みな、女神様をんながみさまのお織おり遊あそぼします、七夕たなばたのやうな七色なないろの絲いとになると申まをしますから。ぢやあ周さんしゅうさんだと、和製わせいの羅紗らしやになるんだね、なぞと四郎さんしじろうさんのいふ時ときは、運轉手うんてんしゆこそ、灘乗なだのりの船頭せんどうで、一滴てきも

やりませんが、こちらは、麥酒を三本ばかり、冷々として、うまい。

さかなといふのが、をばさんが、一寸立違つたと思ふ間に、氷のやうな流の中から扁い石を拾つて、山葵をですね。巖間から抜きたてのを、すぐに、おろしかけて、葉のまゝです。紫の雪に對していゝ、萌黄の霜のやうで、殆ど仙境の酥酪です。石ですが、薄墨の肌にきら／＼と鏤めたやうに金色の粉が光るんです。一かけら貰つて來ました。――家内が何處か藏つて置いたやうですから、すぐお勝手に合ひます。あとで其の石の山葵で。」

「はて、承りましたばかりでも、庄屋は腹を扱はれます。鎌腹といふやつでございませぬ。酒は御存じの通りですが、番茶の焙じたてで頂戴ませう。いゝえ、手前どもにも、自慢の料理、椎茸の氷碗。」

「氷碗。」

「嚴寒のうちでないと間に合ひませんから、おい

それとお客様きやくさまにはさし上げあかねますが、天城あまぎの奥おくでも最極上さいごくじやう、肉厚にくあつな生椎茸なましひたけを雪ゆきに浸ひたして、そのまゝ碗わんにもつて自然しぜんに生なまの汁じゅうのしたゝる處ところを味あぢはひます。珍ちん品びんでございましたな。しかし唯今たゞいまの石いしの山葵わさびをうかゞつては庄屋しやうやも袴腰はかまじしを折をりますな。で、それで、麥酒ビールで陶然たうぜんとなさつたのでは、斧のの柄えが朽くませう。

特に、唐からの仙人せんじんと違ちがつて、其その白しろい頸えりでございますから。

「今晚こんばんとは、うらはらで、山やまの上うへでは、

嚙さぞ、御婦人連ごふじんれん、御退屈ごたいくつで

「なに、それどころですか。谷たにを出でました時は、まだ掬飯むすびひと一つが、兩名りやうめいとも片附かたづきません。お午飯ひるが濟すんだといふのに、天城入あまぎいりの女武者をんなむしやは、おなじくその二合半こなからひとにぎ一握ひとにぎりの腰兵糧こしへぎやうで、こればかりはつはものです。ミルクキヤラメル、チュウインガム、餡あんばん、捻ねぢばん、鹽煎餅しほせんぺいなどがずらりと棚たなに並ならんだ土間どまに、卓子テーブルにさしむかつて、割箸わりばしで、掬飯むすびの蕊しんの鯉節かつをがしので



んぷを、ほぐし、ほぐし、添そへものの、焼松茸やきまつだけ、蒲鉾かまぼこをして遣やりながら、若い女わかをんななんざ、それでも山坂やまさかです、椅子いすに、ぞろりと緋ひの匹田ひつたの裙すその着崩きくづれた處ところなんぞは、人間にんげんといふものは、かうも俗ぞくなものかと

「

「餘あまりおつしやるな。」

と手てを振ふつて、

「あの御容色ごきりやうを

船中せんちゆうにてさやうな事ことは

でございませぬ。それ、狸たぬき子のやうに

芝居しばいの遠音とほねが。」

「其その狸たぬきです、其その狸たぬき。」

さういふ私わたしも、

人間界にんげんかいへ、黒くろい外套ぐわいたうで、谷底たにそこから、むく／＼と出でましたよ。」

## その四

「 時間は、まだ早いですから、もう一息、天城山を分入らう。 言ふことは大業です。ー 周さんのお世話になつて、ぶう／＼、自動車にのつた狸の鼻息は荒い。しかし三時さがりですから、小春日和でも、山間はもう陰翳つて來ました。」

「窓に映つて、ばつと五色の松明が冷く燃えるやうな錦葉が見えます、右手の、高い一峰の下だと思つたのが、丁ど追分と云つた形で、此の自動車の進む道路と分れて、萱、尾花の茂つた徑が峯の下へ低くなり、あれがもとの天城越だらうと思ひます。其の岐路を少し入つた處に、樹肌も百日紅のやうに滑らかな、楓の見事なのが、綺麗に藍を交せて燃えて居る。車は誰いふとなく、ひとりと其の一町ばかり手前の山畑に添つて留まりました。」

また、其處にも此處にも、少しづつ色づいたのはありませんけれども、それほど目立つたのはなかつ

たんですから。處ところが、唯ただ其そのの楓かへでばかりではないので  
す。藍納戸あゐなんど、紫紺しこんの女をんなのコオト、狸たぬきの黒くろい外套ぐわいたうの袖そで  
ずれに、大空おほぞらの高嶺たかねから、一巾ひとほつとほ通とほつて、此處こゝばかり、  
薬研やげんなりの、それを装もりあ上げて、濃こいい、薄うすい、錦葉もみぢの、  
いろ／＼が綾あやを織おつて、末廣すゑひろがりになながら古金欄こきんらん  
の能衣装のういしやうを鼓つづみの緒をに掛かけたやうで、影かげを移うつした下草したくさ  
も染そまつて居ゐました。

「些ちと、いふことが、驕おこり過すぎるやうですが、そ  
のかはりその裙すそに、おしろいの花はながうらがれ、坊主ぼうず  
けいとうが干乾ひからびて、黄菊ききくばかり、丈たけも葉はも氣きまゝ  
に伸のびて、亂みだれ咲さきに咲さいた處ところに、張はりも板いたの割われ  
たのを、草籠くさかごへ乗のせたほどな腰掛こしかけが据すゑてあつて、  
街道かいだうを挟はさんで、さしむかひに、亞鉛屋根トタンヤの、つゞれ  
織おりとでも言いひさうな継つぎはぎに錆さびた、穴あなのやうな一いつ  
軒家けんやがありました。が、廂下ひみしたの雨戸あまどの戸袋とぶくろへ、また  
撰よりに、撰よつて、緋色ひいろのもみぢの枝えだを、しがらみ、  
網代あじろの如ごとく並ならべてあります。賣うるのか、土産みやげにでも、  
といふのでせう。ー おかみさん ー 人ひと  
顔がほも見みえない、山蔭やまかげの其その暗くらい店みせから茶ちやを持もつて出で  
た、中婆ちゅうばあさんに言いつたんです。 此この茶ちやが

菊の色より薄くつて、盆が鶏頭ぐらゐに枯れて居る。しかし、風情で——おかみさん、惜いぢやあないか。修善寺から三里餘りかね、此處へ。其の間に、今の處、其處のその楓ぐらゐなもみぢは、樹ぶり枝ぶり一本も見掛けないのに、折るのは惜いぢやあないか、樹が可哀相だ。いゝえ、お前様、この間の大しけで枝が裂けたのを拾ひましてごさいますよ。あゝ、然うかい、それは失禮をしたと街道の眞中で、立話で。

なるほど、故道の下り口へ行つて覗くと、大枝が挫折れて、尾花の中に、蔦を枕で、まだ活々と倒れて居るのです。歸りがけに、霜、時雨で繪の具を溶いた薄彩色の、其の骨を拾つて來ました。が、當館のおかみさんのお流儀で、あの地下室を越した、新館の百疊敷の床の間に活かつて居ますよ。」

「彼館へも、多目不沙汰で。」

いや、庄

屋の媽々の手にかゝつては往生でございませうが、しかし床の間にはお寺の貫主の語の、一行もの、大幅が掛つて居りますから、草木悉皆成佛かも知れま

せん。」

主人は一寸胸さきに掌を組んで笑つて言つた。

「おなじ事を、また客の嬢々連の手にかゝる生憎な草花がありましたよ。野菊、山菊、嫁菜の花、我亦紅、ペンノ草、對手擇ばず。さすが

に天城山で、ふと梅鉢草を見つけてました。此處にも彼處にもと、故道と向ひ合つた、山の根を次第に高く傳つて行きます。不心得な事には、どうせ根を穿つて歸つた處で、若い方も、もの干の瓦鉢で憂目を見せるに過ぎませんものを。内々土ほじりの鍬を忍ばして居るんですから。量見がおそろしい。

山神様にお願ひ申したからいゝわ、で褰端折りの、どてのぼりといふのをはじめる。周

さん、四郎の兩氏は、飛だ此のおつきあひで、山の懷へ取着いて、その萱の根、尾花の葉を掻分ける、騒ぎのうちに、野茨の紅い實を摘まうとすると、其の實にかさなつて、龍膽が、紫の玉を刻んで、一並びに咲いて居ました。一輪引くと――若い女ですが――ゆら／＼と、龍膽が皆動くんです。

蔓

「つる

「花のあとは紅い實になるんですね。學問上の名  
は何だか知りませんが、つるになつて、たとへば桂  
に咲く龍膽、月の中から手繰つて来たもののやうで  
す。これは珍らしい。根を探せと、男連も氣勢つて、  
枯草を掻分け掻分け、その山懐を一畝り、女まじり  
に、小高い處を、やがて、四人とも見えなくなる  
また、寂然としました。

「不精ものの狸が、ぽつねんと一人立つと、向う、  
右斜の、あの高峯の、山の根に、黄菊の亂れた錦の  
梢へ、横に薄霧が渡つたんです。

「こゝへ、水の音が、故道の谷の雑樹を隔てて、  
幽に、さつと鳴つて、それが、遙かに距つた、前刻  
の明琳の瀧が、遠く響くらしく思はれて、其時、は  
じめて、瀧の聲を聞いた氣がしたんです。

唯、漏斗形に空の透く下道は、まるで、瑠璃のビ

ラムिटドを、うつむけにしたやうで、犇々と嵐氣が迫るのでせう。あたりは、藍とも、淺黄とも、外套の裙は薄紫に透過る。

「おほわた、女の聲が高くきこえて、根が見つかりましたか、眞白な尾花の波を、蔓がすらすらとむかうへ手繰られて行く。それが、まるで、エメラルドをおもりに貫きつらねた、釣糸を引くやうに見えて、穂末へ消えると、私は音のない、瀬のない、水のない、大瀧の中へふはりと落ちたやうな氣がしました。」

「此の静寂間へ、二尺ばかり、目の前を少し離れて、幽かに動いたものがあるのです。繪筆の細い尖で、銀泥か、胡粉の點を打つたやうに、ぼうと一つ、飛ぶともなしに浮いて居るものがあります、（おほわた。） なんです。」

「おほわた は、あ、蟲で」

「冬日和のほんのりと、しかし寂しい時に、屋敷」

町の辻だの、宮、堂の表、裏道、小橋の袂などで、子供たちが唄ひました。

（おほわた、来い、来い、まゝくはしよ。

まゝがいやなら、とゝく／＼はしよ。）

あれなんです、天城山中にたつた一つ。」

「これは邪魔になりさうでございますな。」  
と、主人は葎の煙を手で拂つた。

「何の氣なしに、熟と視て居ると、つい心を取られたか、うつかりしたわきを、すつと影のやうに通る女があります。」

「あゝ、あちらで道を横切つて、下へ廻つて、連の、若い女が來たと思ふ。色も似たし、故道を出たらしいのですが、はつきりと見ると違つて居る。」

もう後姿で、其の頸脚の白い美しさ。はツと思ふと悚然としました。袖の下に、蛇の頭、黒く累つた。

いや蝶だ、いやいや、山椒魚。その、びり／＼動くのを竹の串に突さしたのを提げ



たなり、小家の戸袋の、あのもみぢを、褻づれに、それが山椒魚を焼く炎のやうで、其のまゝ横羽目と山の間へ、奥の方へ隠れたんです。

たとへば、明琳の瀧の貴女　　そのお腰元。

――御主人、山椒魚をめされても、いさゝかも

差支へはありますまい。　　苦笑して、御主人、嘲笑つてお聞きなさい。私に　　戀人

も此の年紀ぢやあ　　岡惚れも仇々

しい　　やけ惚れの女が、まあ、あるとお思

ひ下さい。　　

「思ひませう、どうぞ御遠慮なく、はゝは、御都合次第、一つ穴の狸となります。」

「まことに、優しい、おとなしい、しとやかな、薄色の手柄をかけた圓鬘が、脊のすらりとしたのに合つてよく似合ふ、襟の色が濃くつても、肌の消えさうに白々と柔かな、名さへ、お雪さん　――と

いふ、有名な料理屋の主人の養女なんですが。」

「好きこのんで。」

「

」

」

「え」

「好んで、山椒魚をたべますかい。」

「このんで山椒魚？ いや河豚を食つ

た。

「したり、これは。」

「麻布の高臺の三階で、洲崎、品川の雪を見ながら、烈火を並べた、河豚鍋の大一座で、しかも刺身をやらかした。私は小さくなつて見て居

ましたが、容色自若たるのみか、其の刺身をあてた唇は、紅い上へ、西施の乳を、薄りと曳いたやうで、品も優しさも、うつくしさも、聊も損はれません。

或時、此の女の、餘りに白い頸脚と、一筋ほどの肌着の緋を、上から、階子段を下りるのに思はず見惚れて、踏はづして落ちようとして、しばらく足がふらついて、中段に立すくんだ覚えがあります。

何を隠さう。――瀧茶屋で逢つた、をばさんの話と、そこで見た學生は、私の夢ぢやあないか、と薄氣味が悪くなつたくらゐでした。

―― 螢の幽霊を篩に掛けたやうな、白い魂が、  
じつとして、まだ目前に居ます。――

掬ふまでもない、手を仰向けに寄せると、掌へ

真綿の、もの着星ほどに、おほわたが乗つ

たんです。

もみぢ。

と思ふと、おほわたが、ほんのり

―― 紅い――

菊。

と見ると、おほわたが、少し浮いて

―― 黄色です――

お雪さん。

と見ると、おほわたが、ぼうと――

―― 白い――

―― お雪さん。

「おほわたが、すつと立つて、ぼうと

―― 白い――

ふいと飛んで、消えたんですが

」

「や、此の邊に居さうに見えます。」

と、瞬きしつつ、膝を立てた主人が、耳を傾けて  
振向いた。

「おゝお歸りらしいな、橋の上に音がします。今  
しがた打出しの太鼓が聞こえました。」  
と半障子の一間を開けると、こゝは連つた肱掛窓  
のこしらへで、池から取つては三階の高樓だが、裏  
座敷の窓下は地上りに、谿河沿の、館の抜路がすぐ  
近い。

水の淀んだ、静かな流の、川向ひの竹藪を出て、  
狭い一本橋を――女づれが渡りかけた。

「また俗界へ出ましたな。」  
と、巫雀園も肱掛へ、中腰で、  
「山でも四人づれが、丁ど其處へ。」  
う  
枯の蟋蟀は、あれが鳴くかと思ふ、小さな自動車  
の方へ、山小屋の前を通りますとね。暗い處に人は  
なくて、奥のゐるりに赫と火が燃え、串ざしの山根  
魚が、尾も足もぴち／＼と刎ねるのが。」

かたん／＼と、橋が響く。

「地獄の繪の黒い亡者に似て、たゞし、不躰に膚を覗くものを、さうして料理をされた處で、瀧の貴婦人は鬼ではないと、今も、私は思ふんですが

ー

女中の提灯を中へ入れて、くらやみの橋をおもしろづくに、前へ立つた若い女が、窓の人影を認めたら、ほの白い顔に、ぱつちりと目を張つて、莞爾したと思ふと同時にあつた。


「永庵さん

と、其の透る細い聲。

「わツ。」と叫ぶや、何處に居て其處へぶつつかたか、此方からは見えなかつた、二つ三つ、したゝかに振まはした杖ぐるみ、欄干にしがみついた、按摩の響きで、やはな橋の揺れるのが、藪の騒ぐやうに、川の動くやうに、提灯の流るゝやうに。

その五

「―― お雪に、何の事ともなく―― 後日  
です 天城山の明琳の瀧といふのを知つて  
あるか、と聞きますとね。

―― 知つてる處か、うまれたのが湯ヶ島の温泉  
ださうで、弱い母は、病身で湯治中、其の産後でな  
くなつたと言ひます。のみならず、夢、幻に、瀧の  
女神様とは知己で、晝間でも、うつとりとする時は、  
虚空をふは／＼と瀧へ行つて、大勢きれいなおとも  
だちと一所に、機を織つたり、糸車を廻はして織り  
つむぎの業をする。瀧の女神様も、おな  
じやうに、蝶、鳥、、岩魚のやうな、女たちに交  
つて、縞のきもので、高機をお織りになる  
と言ふんです。

私は聞きながら、その、それ／＼の姫を、舞踏を  
する女、斷髪で―― もう直き其處ですな――  
銀座を踏みあるく女と較べて見ました。たゞ較べ  
て見たゞけです。

さうしてですね

貴女のお織りになるの

は、いづれ、神様なり、佛様なり、天人、天女が縫  
目なしにめすのでせうが、お雪などは、それは、  
一寸極りが悪い、とばかりで、もう薄りと瞼を染め  
てうつむいたんですが、蓮の絲にも似て

居ませう。一度に何寸、ほんの少しづゝ織れるんで  
す。幾月何年かゝりますか。出来上が

世間に出ます。都、鄙、國中、町中、何處をどうし  
てか、そのおりものを肌身におつけになる方が、未  
來の夫になるのです、と言ひます。

處で、織つたものだけ知れる、その絲のしるしは、  
堅く、秘密だと言つて、莞爾しました。

夢にも

これを聞くと、男ものだから、

綾、錦、友染ではありますまいが、紺藍の絲屑一端  
といへども、心なくは棄てられません。

だから、あれだけの容色で、三十近いのに、浮い  
た沙汰も聞かず、見た處さへ、まるで處女なもの

ー ー 無理かも知れませんが、いかにもと思はれ

ました。しかし、お雪さん、霧霞にも乗るとして、  
明琳の瀧まで、どうして通ふんだと聞きますとね、  
「――かうしてゐても、うつとり睡くなると、す  
ぐ参ります。小さな蟲になつて

蟲になつて？

おほわた、――といった時は、河豚のさしみを  
喫てやりながら、尚ほ、純眞無垢な、あの紅梅の  
唇が、一部分、皓齒でなく、小さく胡粉を打つたや  
うに、ぽつと澄んで、すぐに、ふつと浮いて出さう  
に

あゝ、自動車の此の町の騒ぎぢやあ、おほわたが  
消えさうです。

その話を――銀屏風にもみぢを描いた小屏風  
が立つて、床の間には墨繪の小菊の茶掛のかゝつた、  
二階の奥座敷で聞いたあとぢやあ、また階子段を下  
りかねましたよ。さきへりる、とき色の手柄の圓鬘  
のお雪の頸脚で、ころげ落ちさうになりましたね。」



―― この篇の著者は、番町から自動車で、橘川  
と一所で出掛けた。――  
數寄屋橋を渡る時であつた。

―― それこれを、素材にしたと聞く。一幕もの  
の所作が、眞夏、「瀧。」と題して、東京劇場  
で演技中で、おなじ劇場を席に取つて、作者のため  
の祝宴が催された。  
午後四時の開場の、  
座のあいた間をつかつた、正午の宴會に列するので  
ある。

だから、數寄屋橋から銀座へかゝつたのは、正午、  
まさに零時であつた。

たゞ遺憾ながら、當日の祝宴は、われ／＼の、巫  
雀園のために開かれたのではない。座つき作者の大  
當りの二番目のために粧されたものである。

が、はや三原橋へ近づくと、折から火のやうな炎  
天だから丁度よからう。「瀧」「瀧。」巫雀  
團作、立看板が大道路を挟んで目立つたが、百度に

近い炎暑の日盛のためであらう。熾く白熱した舗道に、人通りさへ、殆ど、車も他に見えない。

忽ち萬年橋を、やゝすぢかひに衝と向つた、劇場の高塔の眞下に、大瀧のつくりものが立つて居た。たゞ胡粉ぬりの見上げるばかりの削り板に、藍を刷いて流したのに過ぎないが、描いて聳えた巖角から、眞水を落して、細いが水銀のやうに馳せ流るゝ。瀧壺を圍む青い草の水を嚙むのを、鼻屑目に見れば、龍が玉を啣へた、と思はれない事もない。

巫雀園の名が見える。

其時、自動車が一臺、一車身をすれ／＼に並べた。中から、おなじ會で、すぐ出會ふ、一俳優の夫婦が目禮した。

禮を返すと、車が左右にひらく時見た。唯一人、此の白熱にして無人の境に、織く腰を掛けて、小さな冊子を――こゝは誰も筋書の繪本と見よう――頸を白くうつむいて、手にした。紗綾形か

と思ふ、うすいお納戸の羅の、褸の水よりも深く涼しい。清く美しい婦人を視た。

「あ、母さんが来て居る。」

三十年前の若い母を。車中の、橘川は、また、もの狂はしく、

「瀧の神。」

と窓に夏帽をとつた目を、きらりと射た。婦人が取直したのは、冊子でなく、袖かゞみであつた。日の光を射返して、同乗の著者も目が眩んだ。

肅々と立並ぶ、接待員諸氏の中から、慌しく引返す、橘川の慌しい形相に、怪我をさせまいと、手をとるやうにして一所に出た。が、其の婦人の姿はなかつた。

「あゝ塔の眞上に、小さな雲が黒い。驟雨が來はしないだらうか。」

雷を恐るゝこと、不斷、鬼よりも激しい橘川は、それから宴席に列つても、青い顔をして小さくなつ

て縮んで居た。

作に奇蹟を感じ、思上つた鼻ツ端を、其の光に射られてより、貴女の姿の消ゆるとともに、引挫がれて、冷い汗を流したと、あとで橘川がいふのであつた。

肅で思ふ。我が作を、その母に読ませ、はた見せて、かつ恥ぢない自信を得た作者は少なからう。幾人がある。

ましてや、神佛の前に展巻して。

橘川の意は諒せらるゝ。

「著者の、すぐ近間な黒堀のめぐつた辻に、椎の植込に蔽はれながら、櫻のもみぢしたのがある。庭の菊も堀の透間を明く覗く。

このもの静かなたそがれを、おほわたの遊ぶのを見た。

あの蟲は人に遁げない。

そつと、てのひら掌に据すゑて、

もみぢ。

と思おもふと、おほわたが、ほんのり

――紅あかい――

菊きく。

と見みると、おほわたが、少すこし浮ういて、

――黄きいろ色いろです。――

――以下いか橘きつ川かはには内ない證しよである。

そつと、

「お雪ゆきさん。」

と見みると、おほわたがぼうと

――白しろい――

「お雪ゆきさん。」

おほわたが、すつと、立たつてぼうと

――白しろい――

「お雪ゆきさん。」

ぼうと白しろい

【完】